

●東京国際指揮者 コンクール2024

浅岡 弘和

既に57年の歴史を持つこのコンクールも今回から東京国際指揮者コンクールと改称され新装開店。さらに巨星小澤征爾没後初めての開催となったが果たして世界の指揮界を背負って立つ新星は出現するか？

審査委員会は委員長が2023年に亡くなった外山雄三に替わり尾高忠明。審査委員はジェフ・アレクサンダー、マイク・ジョージ、広上淳一、ライナー・ホーネック、オッコ・カム、下野竜也、ユベール・スダーン、高関健といった指揮界を代表する錚々たる面々で、担当オケは予選が東京フィル、本選が新日本フィル。

参加資格は本選時満38歳以下であることくらいで国籍も不問。コロナ禍も終わり37ヶ国から総勢291名もの応募者があった由。事前に書類と動画による予備選考がありそれをクリアした精鋭18名が10月7日から始まった1次審査に挑んだが今回女性は4人。

7&8日の1次予選課題曲はモーツァルト。20分で「プラハ」第1楽章と第2楽章の抜粋に「魔笛」の難曲、タミーノと僧侶のレチタティーヴォ。独唱は中井亮一と田中大揮が担当。2次予選進出者は喜古恵理香、コルニリオス・ヴィクトル・ミハイリディス（ギリシャ）、高橋達馬、神成大輝、吉崎理乃、ニキタ・ソローキン（フランス）、岡崎広樹、村上史昂、ライリー・ホールデン・コート=ウッド（英国）の9名。

9&10日の2次予選は3曲。まずシューマンの4番とバルトーク／舞蹈組曲を抜粋で25分程度指揮。休憩後の後半は川田知子をソリストにシベリウス／ヴァイオリン協奏曲第1楽章前半を15分ほど。その結果ファイナリストはミハイリディス、吉崎、岡崎、コート=ウッドの4人に絞られた。

13日の本選は前半が藤倉大「Glorious Clouds」。後半が参加者の選曲による自由曲だった。

◎結果と自由曲

第1位：ミハイリディス（ショスタコーヴィチ／10番3&4楽章）

第2位：コート=ウッド（メンデルスゾーン「スコットランド」1&4楽章）

第3位：吉崎理乃（R・シュトラウス「死と変容」）

入選：岡崎広樹（チャイコフスキー／4番第1楽章）

特別賞&齋藤秀雄賞：吉崎理乃、聴衆賞：コート=ウッド、オーケストラ賞：ミハイリディス*さらに2025年7月、サントリーホールでN響を振っての披露演奏会開催。

やはり充分な実績のある外国人二人はまだ学生の日本人二人とは大きな差があり、この二人がツートップとなることは当初から予想された。1位のミハイリディスは同じギリシャ系と言われるカラヤンが唯一レパートリーにしていたショスタコである10番を選び、しかもDSCH音型の出で来る3&4楽章を演奏。血腥い革命や死の諧謔めいたものをふんだんに聞かせ卓越した表現力を見せつけていた。2位のコート=ウッドはBBCスコティッシュ響で仕事をしたりで関係の深いスコッチを選択。速いテンポのアグレッシブな演奏で雄弁な音のドラマを構築してはいたがちと突っ走りすぎたかも。

以下は翌日の記者会見時の総評で、まずは尾高委員長。「1位の人はこのまま世に出て立派にやっけて行ける。オーケストラが全然迷わずについて行ける。その証拠にオケから『オーケストラ賞』を授与されました。2位も見事な指揮で特に本選の課題曲だった藤倉作品の全く違う面を見ることができ、3位の吉崎はまだ学生だが洗練しており音楽を素直に表現し、好感が持てた」

今回初参加の下野委員からは「指揮の技術よりもそこにいい演奏、いい音楽が紡ぎ出せていたかどうかを基準にしておりました。今回の1位の方は経験もお有りて現にオケとのリハでのコミュニケーションとか演奏会での手順とか全てに於いて圧倒的に素晴らしかった。総合的に鑑みて1位という結果になったと思います。2位の方は大変チャーミングな人柄でオケを魅了し1次予選から美しい音を引き出しておられたのには注目していました。彼が指揮台に立つことによってオケから素晴らしい音が出る。特筆すべきは本選の藤倉作品でした。3位の吉崎さんは大変お若く経験値はないのでしょうか。しかしオケに自分の言葉を正直に伝えて構築の難しい作品を立体的に鳴らしてみせた。完成度でこの順で評価されたのは妥当でしょう」

次は高関委員「コンクールには受ける時期というものがある。ちょうどピッタリ当たったその時に1位になる。その意味で1位の方はちょうどいい時に受けたと思う。これから世に出て活躍されるでしょう。2位の方は下野さんの言う通り藤倉作品が傑出しテクスチャーをよく理解していた」

広上委員は「コンクールですから順位をつけざるをえないが将来性とか現段階での成熟度、本選での演奏など総合的な部分を俯瞰した結果このような順位になったわけです。年齢の違い、経験値、完成度など持っている才能は三人三様で悩ましかったが非常にフェアなやり方をしたコンクールだと改めて思いました」

そして全員のコメントの後、再び尾高委員長が「これはスタート地点です。僕が54年前にこのコンクールを受けた時、1位は小泉和裕さんで僕は2位だった。入選に井上道義さんや小林研一郎さんもいた。今その人たちは皆大活躍しています。順位は関係ありません。問題はこれから彼らがどのような道を歩んで行くかです。1位と3位は年齢が違うがカラヤンとバーンスタインも年齢は離れていたものの現役時代は完全にライバルだった。今回出場した皆さんもそれほど遠くない将来にそうなるのではないかと締め括った。

*本稿は音楽現代誌に掲載されたレポートを全面改稿したものです。

浅岡弘和（あさおか・ひろかず）

音楽評論家。「ワーグナーそしてマイスター・エックハルト」にて日本ワーグナー協会賞佳作入選。以来「音楽現代」を中心に作曲家論、演奏家論、演奏会評など評論活動を展開。日本推理作家協会会員。著作に「モーツァルトと歎異抄」「二十世紀の巨匠たち」「200CDヴァイオリン」(共著)「身辺雑記風に」(連載エッセイ)など。ユーチューブで自作の交響曲2曲と令和協奏曲(ヴァイオリン協奏曲)、弦楽四重奏曲を公開中。